

第43回夏季大学「新しい気象学」実施報告

教育と普及委員会

日本気象学会は、最新の気象学の普及を目指して、小・中・高等学校の先生方と気象を学ばれている学生や一般の方を対象とした講座を「夏季大学」と銘打って、毎年夏休みの時期に開催している。第43回（2009年）は、「顕著現象の解析」をテーマに取り上げ、8月1日（土）、2日（日）の2日間、東京の気象庁講堂で開講した。

近年は局地的な大雨などの顕著な大気現象に対する関心が高まるとともに、それらの発生メカニズムや予測手法が注目されている。また、ネットワークの発展や研究・教育目的での気象データや解析ツールの公開が進み、天気図の取得や気象データの解析が容易に行えるようになってきた。このような背景から、今年度の夏季大学では顕著現象のメカニズムや予測について、講義と実習を行った。1日目、2日目ともに午前中は講義を行い、午後は午前中の講義の理解を深めるための実習（第1図）を行う形式をとり、1日を通して一貫したテーマを扱うようにした。講師名と講義題目を、第1表に掲げる。

今回の夏季大学は両日とも災害をもたらすような降水を扱うテーマであったが、1日目はデータ解析や数値モデルによる、豪雨の発生メカニズムに関する最新の知見の紹介や、気象庁メソ解析データと気象データの可視化ソフト“GrADS”（Grid Analysis and Dis-

play System, “グラッズ”と読む）を用いた実習といった、比較的アカデミックな、新しい技術を用いた内容であった。2日目は大雨を監視・予測するための資料の概要や、限られた時間と資料から、実況解析や考えられる予報シナリオを立てる実習など、実際の予報作業を想定した内容であった。同じテーマでも異なる視点から扱うことで、多くのことを学べることに興味深い点であったと考えている。

受講者に持ち込んでいただいたパソコンの台数の関係もあり、実習は2～3人1組で行うようにした。GrADSを用いた実習では、若い受講生がパソコンの操作に慣れない受講生を手助けしていたり、逆に、エマグラムや手書きの局地天気図を作成する実習では、経験豊富な受講生が若い受講生に手ほどきをするなど、受講生同士がお互いの得意な分野を教えあう場面も見られた。

今回の受講者は70名程度で、年齢は10代から80代までと幅広い年代の方々が参加した。また、参加申し込み開始からわずか10日あまりで定員に達したことや、受講者の約6割が夏季大学への初参加であったことも、ここ数年の夏季大学の中では特徴的であった。2008年の夏季に局地的な大雨が多発したこともあっ

第1表 第43回「夏季大学」の講義題目と講師名（敬称略）。

8月1日（土）	
突発的集中豪雨の発生環境場と発生メカニズム	加藤 輝之（気象研究所予報研究部）
突発的集中豪雨の解析（実習）	津口 裕茂（気象研究所予報研究部）
8月2日（日）	
局地的大雨から身を守るために	鈴木 和史（気象庁予報部業務課）
局地的な大雨の予測に向けた環境場の把握と各種観測・予報システムによる監視	中鉢 幸悦（気象大学校）、村中 明（気象庁予報部予報課）、鈴木 和史（気象庁予報部業務課）



第1図 実習風景。雑司が谷で豪雨の発生した、8月5日9時における館野のエマグラムから、自由対流高度と浮力がなくなる高度を検出し、成層状態が潜在的に不安定であったこと確認している。

て、今回のテーマがタイムリーな話題であり、受講者の関心も高いことがうかがえた。なお、参加者のうち日本気象学会の会員は約5割であった。

全講義終了後に受講者から提出していただいたアンケートによれば、講義の難易度に関しては概ね「適当である」という回答であった。実習に関しては、ほとんどの受講者が「興味深い」と回答されていた。時間をかけて充実した講義・実習資料を準備していただいた講師の方々に感謝する次第である。その一方で、講義資料だけでなくプレゼンテーション資料を配布して欲しい、課題を追うのに忙しかったので、実習時間を

長めにとって欲しい、といったご意見もいただいた。これらのご意見に対しては、講師との事前の密な連絡や、受講生の習熟度の把握を行い、可能な限り対応していきたい。今後希望するテーマとしては、気候変動に関する話題や、衛星画像の解析、気象情報の利用方法に関する内容、地域ごとの気象特性に関する話題など、さまざまなご要望をいただいた。また、気象学会に対して、夏季大学のように会員以外にも門戸を開く場を増やしてほしいと望む声もあった。これらのご意見を参考にしながら、今後ともさらに充実した夏季大学を企画したい。